

日本英文学会関東支部
第12回（2016年度夏季大会）
プログラム

日時：2016年6月18日（土）

会場：青山学院大学青山キャンパス

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

アクセス

JR 山手線、JR 埼京線、東急線、京王井の頭線、東京メトロ副都心線 他「渋谷駅」より徒歩10分
東京メトロ（銀座線・千代田線・半蔵門線）「表参道駅」より徒歩5分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

*会場番号：55Xは5号館5階のX番教室、173YZは17号館3階のYZ番教室となります

| | | | | |
|---------------------------|---|---|---|---|
| 11:30 — | 開場・受付開始（受付：5号館5階、研究発表後は17号館3階；控室：558） | | | |
| 研究発表 | 第1会場 551 | 第2会場 554 | 第3会場 556 | 第4会場 557 |
| | Teaching Zadie Smith's <i>The Embassy of Cambodia</i> (2013) in the EFL Classroom: A Case Study (発表者) 東京大学非常勤講師 志子田 祥子 (司会) 鶴見大学准教授 深谷 素子 | 偶像打破のための想像力と解釈——Cynthia Ozick の <i>Heir to the Glimmering World</i> (発表者) 日本女子大学 学術研究員 秋田 万里子 (司会) 日本大学准教授 牧野 理英 | <i>The Voyage Out</i> と “On Being III” における病気の表象 (発表者) 青山学院大学大学院 四戸 慶介 (司会) 駒澤大学准教授 川崎 明子 | 少女雑誌における女性の教育と社会進出を巡る議論—— <i>Atalanta</i> と <i>Girl's Own Paper</i> を例に (発表者) 早稲田大学大学院 牟田 有紀子 (司会) 東洋大学准教授 井上 美雪 |
| 12:10 13:10 | 部門別シンポジウム | | 英語教育部門シンポジウム | |
| 13:20 15:20 | 英米文学部門シンポジウム (17309) イギリス・アメリカ文学史補遺—— 英米文学のなかの非英米文学 (司会・講師) フェリス女学院大学教授 富樫 剛 (講師) 東京農業大学教授 岩永 弘人 (講師) 和光大学准教授 遠藤 朋之 | | 英語教育部門シンポジウム (17310) 日本の英語教育における言語習得の可能性——言語学と言語教育に必要な不可欠な実践的理論の提唱 (司会・講師) 首都大学東京客員研究員 大山 健一 (講師) 東京電機大学准教授 磯 達夫 (講師) 北里大学講師 中戸 照恵 | |
| メイン・シンポジウム (17309) | 近代と情動——文学、美学、哲学、心理学の相互交渉をめぐって | | | |
| 15:30 17:30 | (司会・講師) 成蹊大学教授 遠藤 不比人 (講師) 青山学院大学准教授 古井 義昭 (講師) 青山学院大学准教授 齊藤 弘平 (講師) 昭和薬科大学教授 鈴木 英明 | | | |
| 18:00 20:00 | 懇親会（アイビーホール 青学会館 グローリー館 2F シャロン） | | | |

開場・受付開始（11:30 より 5号館5階にて）

12:10-13:10

【研究発表】

第1会場（5号館5階551教室）

（発表者）東京大学非常勤講師 志子田 祥子

（司会）鶴見大学准教授 深谷 素子

Teaching Zadie Smith's *The Embassy of Cambodia* (2013) in the EFL Classroom:
A Case Study

大学の教養課程での英語教育において文学作品を教材として用いることの有用性と重要性は広く研究・議論されてきたが、近年では所謂「英文学史の名作」や「正典」とされる作品以外のテキストを活用した授業実践の報告も見られるようになり、その成果は様々な場で発表されている。

本発表では、現代英国の作家 Zadie Smith の *The Embassy of Cambodia* (2013) を用いた大学での英語授業の試みについて報告する。この授業では、文体論の考え方にに基づき、本文中の語句や表現などの文体要素に注意を払いながら、グループ発表形式によって読み進めていく活動を授業の中心に据えることで、学習者の母語ではない英語のさまざまな言語形式に反応する能力を養うことを目指した。またその他にも作品について議論する活動などを多く取り入れることで学習者らの能動的な取り組みを促し、英語の運用能力の増進を目指した。そのような授業実践について報告し、小説を用いた英語授業実践手法の可能性を考察することが本発表の目的である。

第2会場（5号館5階554教室）

（発表者）日本女子大学学術研究員 秋田 万里子

（司会）日本大学准教授 牧野 理英

偶像打破のための想像力と解釈——Cynthia Ozick の *Heir to the Glimmering World*

1966年にデビューしたユダヤ系アメリカ人作家 Cynthia Ozick (1928-) の初期作品において、芸術創造と偶像創造の問題は主要テーマの一つであった。彼女は芸術創造をユダヤ教の禁忌である偶像創造と捉え、それを生み出す芸術家の想像力を、律法を犯し、ユダヤ性を揺るがせる罪深いものとして描いてきた。

しかし2004年の長編 *Heir to the Glimmering World* では、想像力が内包する偶像創造の危険性よりも、想像力の持つ無限の可能性により重点が置かれている。この作品で主に扱われている想像力とは、ある対象（テキスト）の隠れた意味を推測・想像すること、つまり「解釈」である。

この作品は1935年のアメリカを舞台とし、ナチス・ドイツから亡命してきたユダヤ人一家の家庭内での出来事を描いているが、作中で特に焦点が当てられている登場人物は、カライ派（モーセ

五書のみを聖典と認めるユダヤ教学派)の教授と、絵本のキャラクターのモデルにされた青年である。この二人の人物は、共に想像力や解釈を否定し、「テキスト」からあらゆるコンテキストを排除し、ある種の「テキスト中心主義」に傾倒したため悲劇に陥る。本発表では、ユダヤ教における解釈の概念および偶像崇拜禁止の観点から、*Heir to the Glimmering World*に見られる解釈と想像力の意味を考察する。

第3会場 (5号館5階556教室)

(発表者) 青山学院大学大学院 四戸 慶介

(司会) 駒澤大学准教授 川崎 明子

The Voyage Out と“On Being Ill”における病気の表象

本発表では1926年のエッセイ“On Being Ill”におけるVirginia Woolfの主張、愛や憎しみ等のこれまで文学が扱ってきた一般的なテーマに替わって、風邪や歯痛、熱、不眠、坐骨神経痛といった作品テーマとしては陽の当たらない、日常生活に埋もれた病気やその症状に焦点を当て、それらの美的価値を認め、“a daily drama of the body”(318)を描く必要がある、という主張を彼女の提示したひとつの美学として捉えることを目的とする。Woolfがエッセイで提示したその病気の美学的コンセプトの再評価は、本発表のもうひとつの目的でもあるWoolfの初期の小説*The Voyage Out*(1915)に表れるRachel Vinraceの病気の表象の再読の手がかりとなる。この発表は病人の身体経験の描かれ方に着目しWoolfのモダニストとしての美学とその政治性を考察していく。

第4会場 (5号館5階557教室)

(発表者) 早稲田大学大学院 牟田 有紀子

(司会) 東洋大学准教授 井上 美雪

少女雑誌における女性の教育と社会進出を巡る議論——*Atalanta* と *Girl's Own Paper* を例に

本発表の目的は、19世紀末の女性の人生における選択肢の広がり、如何に雑誌の紙面に現れ、そして雑誌がその活発な議論の場となっていたかを明らかにすることである。急進派の*Atalanta*と保守派の*Girl's Own Paper (GOP)*という性格の異なった雑誌を使用し、女性の社会進出や自由意志の拡大を多角的に捉えたい。この発表は2部構成になる予定で、第1部ではエッセイと読者投稿欄を通して、女性の教育と就職に関する議論がどのように展開されているかを検証する。第2部では、第1部で明らかにしたそれぞれの雑誌の女性の社会進出への態度を前提に、特に学校小説に焦点を当てながら、連載小説に女性の選択肢の拡大がどのように表象されているかを考察する。*Atalanta*と*GOP*の1880年代90年代の記事に絞り、リアルタイムで繰り広げられた中産階級の女性の生活の変化の一端を明らかにしたい。

13:20-15:20 17号館3階17309教室

【英米文学部門シンポジウム】

イギリス・アメリカ文学史補遺——英米文学のなかの非英米文学

(司会・講師) フェリス女学院大学教授 富樫 剛

(講師) 東京農業大学教授 岩永 弘人

(講師) 和光大学准教授 遠藤 朋之

一国の文学・文化はその国のみが作りだすものではない。現代日本の文学・音楽・絵画・スポーツ等のなか、他国からの影響を受けていないもの、純粋に日本固有といえるものはほとんどない。英米文学についても事情は同じである。ボッカチオらの影響下に書かれた『カンタベリー物語』から、俳句の詩作法を踏襲したパウンドのイマジズムまで、英米文学の発展の背後には非英米文学がある。本シンポジウムでは、これら英米にとっての外国文学が英米文学、特に詩に対して及ぼしてきた影響について再検討を加え、従来の研究では見えなかった文学史の細部・深部を明らかにすることをめざす。

■ ジャイルズ・フレッチャーのソネットとネオラテンの詩人たち

岩永 弘人

今回の発表では、ネオラテン（「ルネサンスラテン」と同義）の影響を強く受けたジャイルズ・フレッチャー（Giles Fletcher, 1546-1611）のソネット詩集『リシア』の作品をいくつか取り上げ、彼が種本とした詩人の1人であるヨハネス・セクンドゥス（1511-1536）の *Basia* (Kisses) と比較してみたい。

実はフレッチャーが最も多く翻案しているネオラテンの詩人は、ヒエロニムス・アンゲリアヌス（c.1480-1535）であるというのが定説であるが、ここでは敢えてセクンドゥスに焦点を絞り、明らかに彼の作品を素材にした作品と、直接ではないがその影響があるのではと思われる作品の両方をとりあげ、彼の翻訳手法について考える試みをしたい。

フレッチャー、セクンドゥス以外に言及される主な詩人は、イギリスではシドニー、シェイクスピア、ダン、フランスではロンサールの予定である。もちろん、ネオラテニストとしてのペトラルカへのまなざしも必要となってくると予想される。

■ カルペ・ディエムの系譜——17世紀前半のホラティウス

富樫 剛

Carpe diem（「今日という花を摘もう」）——これはもちろんホラティウスのオード 1.11 からのフレーズであるが、この主題がホラティウス以外の作品を通じてイギリスに入ってきたことはあまり知られていない。このフレーズがイギリスに定着したのが 19 世紀以降であることも、である。

このようにカルペ・ディエムの主題をめぐる従来の理解は不十分であり、これを補うべく本稿では、まず16-17世紀におけるセネカ、ロンサル、オウィディウス、カトウルス、ホラティウス、アナクレオン（「アナクレオン風の詩」）らの翻訳・翻案事情を概観する。そのうえで、1620年代から人気が高まっていったホラティウスおよびその翻訳・翻案者としてのロバート・ヘリック（Robert Herrick, 1591-1674）をとりあげ、当時のイギリスにおいてホラティウスやカルペ・ディエムの主題がもっていた社会的意義を明らかにしたい。

■ エズラ・パウンドの「翻訳」は「誤訳」か？

遠藤 朋之

エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885-1972）の、いわゆる「翻訳」には、常に「名訳」・「誤訳」との毀誉褒貶がつきまとう。本発表は、その「名訳」・「誤訳」を二つの論点から「パウンドの創作」という問題へと統合する試みである。

ひとつ目は、「詩」とはすべての人間の共有財産である、というパウンド独自の概念である。共有財産であれば、どのように活用しても構わないはずである。

ふたつ目。パウンドにとって「詩」とは自らの思いを仮託するツール、つまり「ペルソナ」であった。「翻訳」と「創作」、あるいは古今東西の違いはなく、「ペルソナ」として機能すれば、それは「詩」と呼ぶべきものであった。

本発表においては、まず、パウンドにとっての「詩」が共有財産であることを散文から確認する。そのうえでパウンドの「ペルソナ」としての「詩」を散文と「翻訳」から確認し、パウンドにとって「翻訳」も「詩作」も、同じ「創作」であったことを論証したい。

13:20-15:20 17号館3階17310教室

【英語教育部門シンポジウム】

日本の英語教育における言語習得の可能性 ——言語学と言語教育に必要な実践的理論の提唱

（司会・講師）首都大学東京客員研究員 大山 健一

（講師）東京電機大学准教授 磯 達夫

（講師）北里大学講師 中戸 照恵

日本人が英語を学ぶ時にも教える時にも同じように学び、同じように教えることは困難である。対象者や環境などの違いにより、ことばの理解と表現には、様々な課題が残されている。しかしながら、学ぶことと教えることの架け橋になり得るものは存在している。それは「言語習得」である。

この言語習得は、母語習得と第二言語・外国語習得に大別されるが、言語学（英語学）と言語教育（英語教育）の両方に位置しており、理論を基に実践へ活かすための分野である。ある英文を読

むことから別の英文が読めるようになることや、あるリーディングの教え方が別のライティングの教え方にも適応できることなど、このような応用力こそが言語習得の要である。

言語学における「音声・音韻」、「語彙」、「統語」の分野のそれぞれの専門家から言語習得とはどのようなことであるのか、日本人が英語を学ぶ時と教える時にどのような点に留意しなくてはならないのかを提案して頂く。以上から、本シンポジウムを通して今後の言語学と言語教育の両方において、一人ひとりが抱える課題への解決の糸口になり得る場になれば幸いである。

■ 音声・音韻

大山 健一

音声・音韻習得論では、日本人英語学習者にとっては、対象言語となる英語と母語の日本語との音声面での相違には距離があり、その距離が近い（より似ている）と習得がしやすいという説 Perceptual Assimilation Model (PAM) (Best 1995)がある。その一方で、その距離が遠い（より似ていない）と習得がしやすいという説 Speech Learning Model (SLM) (Flege 1995)がある。よって、このような習得における距離を踏まえ、言語音を「学ぶ」「教える」という視点を基にすると、似ているから学習が易しいとは限らず、似ていないから難しいとは限らないことを配慮する必要性があることを提唱する。

■ 語彙

磯 達夫

語彙知識が言語理解・産出の場面において必要不可欠な要素の一つであることは揺るぎない事実である。では、「語彙を知っている」とはどういう状態を指すのだろうか？ また、語彙は意識的に学習しようとして覚えるものなのか、それとも英語を使用する中で、偶発的に学習するべきものなのか？ 本発表では、語彙知識をキーワードとして、これまでの研究で明らかになっている事象から出発し、今後言語学と言語教育学の両方の知見から研究を行うべきであると考えられる課題を参加者の皆様とともに考え、両学域のさらなる発展へとつなげて行きたいと考えています。

■ 統語

中戸 照恵

第一言語獲得とは異なり、第二言語習得では「臨界期」や「言語インプットの量・質」などの問題があり、効果的な言語習得を達成するためには、第一言語の影響を受けやすい点に関しては、意識的な訓練が必要となると考えられます。英語・日本語に見られる統語的性質を細分化し、抽象化して比べると、英語を獲得している子ども（英語児）の初期段階での知識は、日本語を母語とする話者（日本語話者）の知識に類似した性質を示すことがあります。

本発表では、日本語と英語の統語的相違のうち、主に(1)主語の省略、(2)代名詞表現の使用、(3)冠詞の使用、(4)名詞の単数・複数表示などに着目し、英語児・英語を学ぶ日本語話者からの資料

を提示します。本資料を基に、ディスカッション等を通して、日本語話者に対する効果的なライティング指導法について可能な限り考察していきたいと考えています。

15:30-17:30 17号館3階17309教室

【メイン・シンポジウム】

近代と情動——文学、美学、哲学、心理学の相互交渉をめぐって

(司会・講師) 成蹊大学教授 遠藤 不比人

(講師) 青山学院大学准教授 古井 義昭

(講師) 青山学院大学准教授 齊藤 弘平

(講師) 昭和薬科大学教授 鈴木 英明

PMLA 130. 5 (2015) の「感情 emotion」特集は、当該概念それ自体の意味論的自己撞着から議論を開始する。「不気味なもの」を語るフロイトのごとく各種の辞書(たとえば『ウェブスター』)を繙き、まずは「感情」なるものが19世紀ブルジョワ主体の「個人の所有物」として意味づけられた消息が示される。一方で、*motion* と語源的に近接する *emotion* が「個人」の制御の及ばぬ心的強度 (*affectivity*) を帯びることを、辞書的定義は同時に指し示す。個人の所有物でありながらその支配を逸脱する「感情」——その意味論的矛盾は、近代的「個人=感情=内面」という概念それ自体の不可能性を暗示する。本シンポジウムは、まさにその不可能性に宿る「もの」として「情動」の強度=否定性を読み、近代の「心」をめぐる諸言説の制度性のみならず、昨今の「情動理論」のそれにも介入を試みる。(文責・遠藤)

■ “Miserable Loneliness”——ハーマン・メルヴィル作品における醜い／秘密の感情

古井 義昭

アメリカ文学分野における近年のアフェクト研究の主要成果の一つとして、Sianne Ngaiの *Ugly Feelings* (2005) が挙げられる。本発表は、Ngaiが定義するところの「醜い感情」という概念を参照しながら、主にハーマン・メルヴィルの “*Bartleby*” (1853) における感情のありようを論じるものである。この短編小説は実に多くの「醜い感情」に満ちている。内面をほとんど明らかにしないバートルビーの感情は読解不可能であるが、弁護士の語り手は苛立ちなどの不快感を常に表明している。それだけではない。語り手はバートルビーの内面を忖度し、寂しさといった醜い感情を一方的に読み込んでいもいる。本発表の目的は、「なにを感じているのかわからない人物」の感情をそれでも言語化してしまうという、語り手の行為——あるいは暴力——について検討することにある。さらには、*The Confidence-Man* (1857) に登場する「秘密の感情」というフレーズにも注目することで、メルヴィル作品一般における、感情が不可視な登場人物たちの存在についても考察したい。

■ “A feeling feels as a gun shoots”——William Jamesのプラグマティックな情動とHenry Jamesのひび

齊藤 弘平

21世紀に最新の批評理論として猛威をふるっているように見える情動理論であるが、その理論的土台に関して言えば、Silvan Tomkins (1911-1991) の唱えた “affective resonance” にせよ、Brian Masumi (1956-) が説く “relationality” にせよ、劇的なパラダイムの転換を要求する新しいものというよりは、むしろ近代アメリカ哲学を継承し発展させたものに思われることがしばしばある。なぜなら、William James (1842-1910) が晩年に提唱した 「根本的経験論」 (radical empiricism) に、説明の体系とその目的がよく似ており、そこで想定されている「感情／情動」 (feeling/affect) の非人称的なはたらきも共通であるからだ。本発表では、「アメリカ近代心理学の父祖」ゆえに William James が考えた「感情／情動」を基盤にする「経験論」としてのプラグマティズムを、あらためて「ただの功利主義」という誤解から解き放ち、その上で、「情動の否定性」という契機が肯定の哲学たるプラグマティズムにも内在してしまう様相を、自ら「プラグマティズム化」した作品を書いたと自負する Henry James の *Golden Bowl* (1904) を通して、考察してみたい。

■ 風景の実存／情動化——ヴァージニア・ウルフとロジャー・フライの美学理論

遠藤 不比人

美学史におけるジャーゴンとしての「ポスト／印象主義」といった水準で議論をされてきたウルフとフライの視覚芸術をめぐる対話に関して、新たな視点が最近提出されている。中でも注目すべきは、19世紀後半の不可知論的哲学を、彼らの美学理論の背後に読む論点である。これが即座に連想させるのは、ド・マンの「時間性の修辞学」におけるワーズワースの実存的な不安である。ド・マンが露わにしたのは、所与の神学的意味論からの「風景」の逸脱、その字義化＝実存化であった。近代（文学）の「起源」をそこに想定してみるなら、ウルフの『燈台へ』と『波』における「風景」の実存化と呼ぶべき言語、あるいはフライにおけるセザンヌの特権化を、「近代」の再歴史化という文脈に位置付けることができる。そこで明らかになるはずは、モダニズム、ポスト／印象主義、ロマン主義といったジャーゴンの抽象性が抑圧する、モダニティの唯物論（情動）的な歴史性である。

■ Paul de Man における「希望」という情動

鈴木 英明

Paul de Manはいわゆる「記号論的転回」以前のテキストにおいて、意識や言葉が、起源へのノスタルジアから自然というモノに合一しようとする態勢を執拗に批判している。そして、そうした態勢を不可能かつ不可避にしている自然の優位性は、マラルメらポスト・ロマン主義の詩人（これはポスト革命世代のことでもある）にとって「失敗と不毛性という感情 (feeling) として経験される」と述べている (“Intentional Structure of the Romantic Image”)。他方で、この論文の末尾

において、そうした自然の優位性にもとづかない、(ルソー、ワーズワス、ヘルダーリンらが模索した) 言語のあり方が、意外なことに“depository of hopes”として言及される。だがこのフレーズに内実が与えられることはない。本発表では、ド・マンのいう「希望」を分節化しがたい情動として捉え、これに意味内容を見出そうとする「愚」を犯すことによって、さまざまな文脈で「ポスト」を生きる私たちの問題を考える一助としたい。

懇親会 (18:00-20:00)

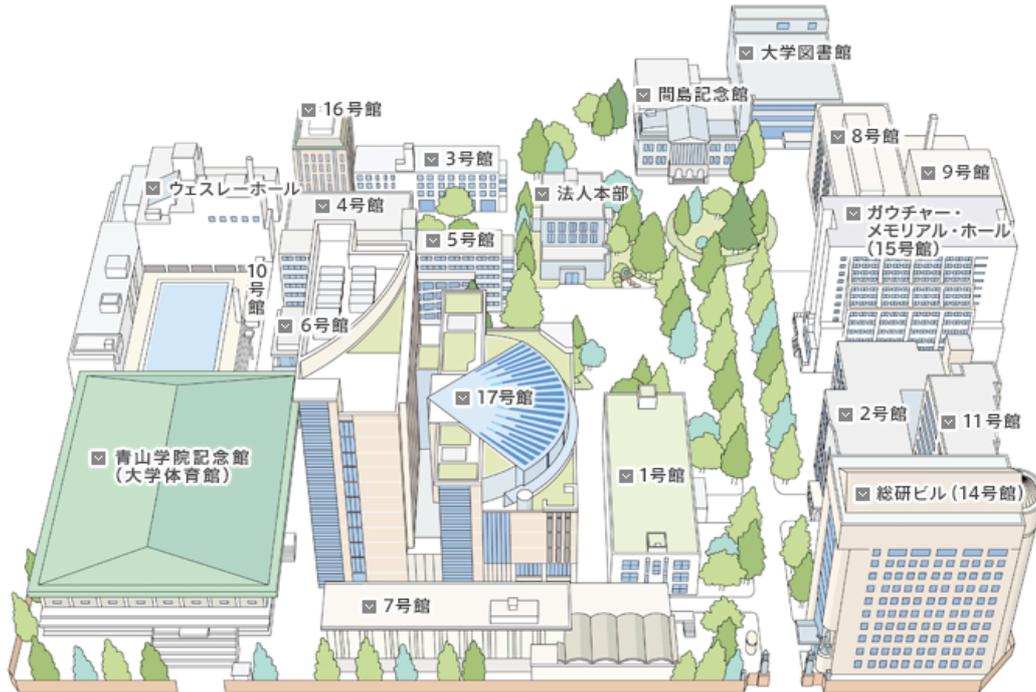
会場 アイビーホール 青学会館

グローリー館 2F シャロン

会費：4,000 円 (学生 2,000 円)

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

キャンパス・マップ



研究発表：5号館5階551, 554, 556, 557、控室：5号館5階558

書店展示：17号館3階会場教室前

英米文学部門シンポジウム、メイン・シンポジウム：17号館3階17309

英語教育部門シンポジウム：17号館3階17310

会場アクセスマップ・懇親会会場



懇親会：アイビーホール青学会館 グローリー館 2F シャロン

*東門よりキャンパスを出て左折しそのままお進みください。または正門よりキャンパスを出てキャンパス外壁沿いに時計回りでお進みください。